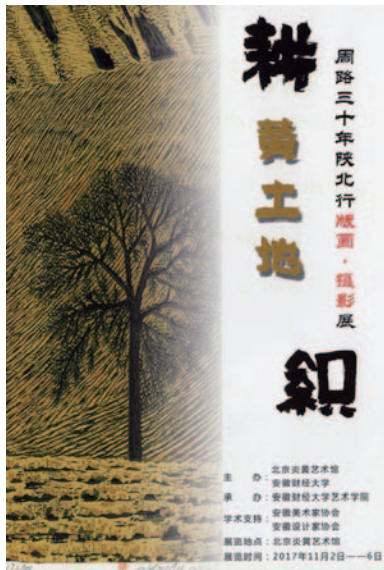


2017年11月2～5日、北京朝陽区にある「炎黄美術館」で、「わんりい会報」に有為楠氏が翻訳掲載中の「陝北黄土高原の花々」の著者・周路氏作品回顧展が開催されました。氏が30年に亘って陝西省陝北地方黄土高原地帯に通い、題材とした版画と写真の展覧会です。版画60点、写真60点を展示の展覧会は大きな反響を呼び、たくさんのネット新聞で紹介されました。その内の、中国中央電子台所属の周涛氏の記事を、我々と同行した高橋節子会員が翻訳しました。周路先生をより深く理解して頂けると共に、先生が愛してやまない陝北地方の剪紙に思いを巡らせていただければと思っております。(田井)

※原文のネット新聞には多数の作品が掲載されておりますが、紙面の関係で、'わんりい' HPに周路先生の作品の部屋を用意しますので、そちらをご覧ください。

中国の伝統文化は多岐にわたる。琴棋書画の四芸、詩、酒、花、茶など詳しく説明すれば枚挙にいとまがない。更にあげれば版画がある。版画も中国美術の重要な要素である。中国版画の起源も諸説紛々で、漢、東晋、六朝から隋までなどという説があるが、長い歴史の流れの中で長足の進歩を遂げた。王朝の交代を何度も経験し、明清時代には多くの文人、書籍商、彫り師の共同作業の下で、いろ



「炎黄美術館」周路版画展チラシ

ろな流派や優秀な作品が現れ、中国版画はますます発展し繁栄するようになった。勇壮なものもあれば優雅で繊細なものもあり、趣は全く異なる。中で安徽省の版画は、その動向が中国全体に影響を及ぼすような重要なポストを占めた。

私は、版画といえば、ケーテ・コルヴィッツというドイツの版画家、彼女の名前が思い浮かぶ。最初は、西湖のほとりで行われた集会だった。集会に集った人々に造型、黒白灰色の対比を正確に理解させ、芸術家が労働者の社会に関心を持ち、被抑圧者の心に思いを寄せるために、朱修立先生が幾度となくコルヴィッツを例に挙げた。彼女の絵では強い怒りが造型になり、それが力強い芸術

言語になって、彼女の偉大な精神を的確に表現している。

もしかしたら、その当時の魯迅はコルヴィッツの芸術に影響されていたのかもしれない。——「同情、愛、怒り、関心」は全て構図の中で一瞬にして吐き出すことができるし、構図はその時々感情への共鳴から生まれている。「版画」は芸術家の「匕首」で、夜明け前の暗闇を鋭く切り開く——

中国の特殊な歴史の時期に、延安魯迅芸術学院は期せずして生まれた。これまでの魯迅芸術学院メンバーの中で一番の版画家であり版画史学家は周蕪である。前置きが長くなったが、本文の主人公・周蕪の子を紹介する。周路先生である。ちょうど今、北京炎黄美術館で「耕織黄土地——周路三十年陕北行版画・摄影展」を開催している。

周路先生を知ったのは四年前である。朱修立先生の紹介で「人文安徽訪談録」という番組のために、専門分野が違う芸術家と会見する約束をした。当時の周路先生は安徽省財形大学芸術学院教務の仕事で忙しく、更にスケッチをするために陝北を往復していた。そのためインタビューはずっ



版画制作に勤しむ周路先生

と先延ばしになった。約束しては会えずの繰り返しで、次第にこの件はだんだんと忘れられてしまった。しかし、「陝北」この二文字の印象は深く、また好奇に満ちている。都市の大学教授がなぜ「陝北」を選んだのか。まさか、芸術家が「苦難」や「面白おかしい話」を探し求めている訳でもあるまいに。

時が移りちょうど過日、朱先生の家で周路先生と偶然出会った。周路先生は出版したばかりの姉妹編『耕織黄土地——周路三十年陝北撮影作品集』と『耕織黄土地——周路三十年陝北行版画作品集』を携えていた。私はページをめくりながら、二人の先生のやり取りを聞いていた。周路先生を観察していると、朱先生が言った通りであった。周路先生は、絶えず手を動かし、唸々と話し、思いはいつも黄土高原にあり、気持ちは芸術にある。午前中の二人のやり取りから、周路先生について私はこう思った。——彼は自ら動いて陝北延川県に根を下ろし、往復すること三十年余、内心に流れているのは、父・周蕪先生の記憶であり、延安芸術精神のインスピレーションである。思いはいつも黄土高原にあり、三十年、一時も離れない。陝北の人々から「憨漢」(実直な男) と呼ばれるまで、外見から内心まで、「黄土高原の息子」になり、「息子」が果たすべき義務を遂行しているのである。つまり、黄土高原の精神を継承し発揚すること、黄土高原の文化を見守り残しておくこ

と、あとに続く研究のためにしっかりした基礎を作ることである。

● 開幕式

中国美術館副館長・安遠遠はこの版画展開幕式で次のように述べた。

「周路先生は、家学、家教、信仰の外に、黄土高原に対して倦まずたゆまず追求している。作品には、素朴な真情が満ち溢れている。先生は黄土高原の人ではないが、黄土高原を異郷とせず自分の故郷にした。これは並大抵のことではない」

安館長の言葉は何のこだわりもなく飾り気がない。実際、中国のどこから来たのであれ、陝北に行ったことがある人は皆よく分かる。この土地に来ると、以前から知っているような親近感が生まれる。なぜか周路先生が撮影した作品に郷愁の念を呼び覚まされる。なぜなら故郷への共感が深くしみ込んでいるからである。

「撮影とは、本来データが付帯した一種の副産物である。時間の堆積に伴って、撮影技術も高くなり、絵画的な見方も身につけた。撮影した画像は一枚の『絵』のようだ。作品集を作り、北京で撮影展を開催して、皆さんから認められた。そのことで私はさらに自信を深めた」

周路先生は撮影を専門にやっていたわけではないが、自然にうまくなっていった。撮影技術は進歩し、彼の芸術は移り変わる黄土高原文化の豊かさをありのままに見せる。時間は絶え間なく進む。我々は時間の速さを測る方法を持ち合わせていない。——本当の速度は見るできない——周路先生のカメラは時間を停止させ、動を静に変える。レンズの目を借りて、黄土高原に暮らす人の喜怒哀楽の一瞬を永遠にする。——黄土高原の純朴さと微笑。

若い頃読んだカルヴィーノの『月光が照らすイチョウの絨毯』の結末にある話を思い出す。「空一面に舞うイチョウ：実は、舞い散るイチョウはいつとき毎、ひとひら毎、ほかの葉とは高さが違

う。だから、もともと実体と実感のない空間が、人間の視覚には連続した平面として見える。一つの平面ごとにひとひらの葉がくるくる舞っている。しかもたった一枚だけで」

芸術家一人ひとは、一人でくるくる舞っている「イチョウの葉」のようである。自分の芸術分野を黙々と耕すこれらの芸術家をつなげてはじめて、彼らの芸術実践と思考が彼らの時代を反映し、人類が歴史や文明を刻んでいることも証明する。

周路先生もそうした芸術家のひとりである。第二の眼を持っている。——カメラと彫刻刀。

延川県黄土高原の生活や文化遺産をまず保存し、後に続く者の研究に役立たせる。例えば剪紙(切り絵)。百年前、黄土高原の剪紙芸術はどのようであったか。剪紙芸術は一か所に止まらず流動交替している。無形文化遺産を伝承する人が次々といなくなり、技術は途絶える。民間芸術も原型の改変にならう。一回変わることは、一回枯れ落ちることである。最終的に時空に消え去る。あたかもこの種の技芸はいまだかつて創造されなかったかのように。

今年5月、海南島三亜藍海リゾートの陳杰勇氏の招待で第23回三門峽黄河文化旅行フェスティバル及び第二回水上カーニバル打ち上げ式に参加した。黄河文化を体験すると同時に、函谷関や陝州地坑院等へ案内してもらった。さらに三門峽市委員会秘書長の特別な計らいで李先念同志が揮毫した「万里黄河第一坝」(万里黄河第一ダム)及び「中流砥柱¹⁾」を参観した。ここではっと気が付いた。陝北は単に地理的概念だけではなく、重要なのは文化的概念なのだと。中華民族の象徴となる黄河、黄帝陵、万里の長城、黄土高原は、ここでは神秘的に一体となり、広大で、荒々しく、雄大である。とりわけ、地坑院へ向かう道で特別な衝撃を受けた。「人類はこのように劣悪な環境で生存できる、まったく奇跡だ」と。そこに住む人民の温かさや純朴さを深く感じた。

陝北は貧しく立ち遅れた地域である。何世代も苦勞して農作業をし、耕作にいそしんできた。粗放農業は陝北人に苦勞に耐える人間としての品格、包容力のある人格を生み出した。陝北へ行ったことがなければ、周路先生の人生経歴を適切に受け止めることができなかつたかもしれない。彼の撮影と版画を深く理解できなかつたかもしれない。

【問】あなたが関心の焦点を黄土高原に絞り、三十年間途切れることなく関心を向け続けてきたのは、どのような考えに依るものですか。

周路先生は何か考えるところがあるようだ。真っ先に家族の影響をあげ、自分自身も黄土高原が格別に好きだと言った。

「沿海部の都市にはわずかしか行ってないが、中国のあらゆるところ、雲南、敦煌、シルクロード、その他の地区についてはかなり深く研究し、学んできた。各地の文化は厚く豊かである。最終的にはやはり、私の性格は黄土高原のリズムに合っていた。力強く果てしなく広く素朴なところに、私は深く心を動かされた。黄土高原には人情味があり、さらに生活の真髓がある。人の一生は良いことをするには短い。私は自分の内なる声に導かれ、黄土高原を、そして延川県を選んだ」

延安魯迅芸術院の起源から父親の影響に至るまで、すべてが彼を黄土高原の選択に導いた。

愛があれば、ただ真心を尽くす。それが幸せや喜びになる。もちろん周路先生が愛する黄土高原も、真心を彼に返してくれた。彼が1999年初めてとった賞は「魯迅版画賞」である。陝北延川文化局に出向中に創作した作品も賞をとった。この賞の獲得はまるで運命づけられているようではないか。延川县政府が授けた「延川県名誉市民」の称号、安徽省政府が授けた「特殊貢献手当専門家」の称号等々、数々の栄誉と成果を獲得した。周路先生はこれらの成功を「黄土高原恩恵」に帰結させた：延川県人民は彼を「憨漢」(実直な男)と呼

ぶ。彼は陝北の農村に寄付をし、希望小学校建設を計画し、二人の子を大学に上げ卒業するまで援助した。黄土高原の老人や子どものために、干ばつで貧窮する黄土高原のために、声をあげてアピールした。彼が延川県を選ぶと同時に、延川県も彼を選んだのだ。

周路先生と黄土高原の物語を話題にしたとき、彼は陝北の谷あい、ヤオトンの人生、故郷の人、野良等々、かの地にまつわる多くのことを家宝のように数え挙げた。三十年余りの映像は黄土高原の「退耕還林²⁾」前後の移り変わりをありのままに映し出している。田舎に残された子供たち、村落の絶え間ない衰退、残された孤独な高齢者、青壮年労働者の流失、子どもたちさえ都会に出て進学する、荒廃する村落、文化遺産の酷い毀損。政府が力を入れて投資し、村を援助しようと旅行関連開発をするけれど、黄土高原のとてつもない変化の大きさにとっては、それらは結局のところ焼け石に水である。総体では、大きな好転を望むのは難しい。いっそう幅広い社会参加を引き起こすと共に、政府の援助を喚起する必要がある。

【問】 初心を忘れず、この「初心」とは何でしょうか。

過去の人を思い、その歩んできた道を知る。心を込めて芸術の構想を練って初心を忘れず、自分の芸術に対する自信を打ち立てる。芸術に携わることは一般の仕事に比べ困難な選択である。とりわけ周路先生のような仕事は、才能があり根気があっても、志がなければ成功は難しい。誰もが「初心を忘れない」と言うが、スローガンだけに終わってしまう。周路先生は、深い文化的背景と哲学に根ざした「初心」をもって、陝北黄土高原で三十年余り携わってきた。

私がゆっくりとページをめくり周路先生の作品集を見終わると、朱修立先生は真心のこもった言葉で次のように述べた。

「我々の先人は、黄土高原で人と自然の関係が、天人合一、天人調和であると気づいた。先住民はこれを我々民族の立命哲学とした。人と自然は共存している。中国の総合的な国力が止まることなく高まるにつれて、目指す道の自信、文化の自信が徐々に世界に深い影響を与えている。これは我々が西側世界と反対の道を選んだからである。その根本の原因は文化の違いである」

周路先生は、黄土高原の思考をすべての人の前に展開し、その思考を呼び覚ました。たやすくできることではない。彼の絵と撮影は時間をかけて丹念に味わわなければならない。奥が深い芸術は、広くて厚い黄土高原の文化、純朴さが持つ魅力を追求する。読むこと・考えることは芸術を楽しむ、精神を豊かにする価値がある。朱先生は二つの「好」を使って周路先生の芸術を褒めたたえた。第一の「好」は取り組む精神。周路先生の父親は延安時代、魯迅芸術学院の学生だった。父親が彼に与えた延安の心を継承した。第二の「好」は、彼の撮影と作品のすべて。黄土高原の厚さ、包容力、純朴さ、豊かさを体現し、われわれ中国文化の基底を思い起こさせてくれた。我々も周先生の芸術を前にその心を継承していかなければならない。

初心を忘れず、前に進む。

■注

- 1) 中流砥柱：河南省三門峽市の黄河中にある柱のような山の名前。
- 2) 退耕還林：条件の悪い農地の耕作をやめ植林を実施する政策。2003年から黄土高原で全面实施。